

さんむのふるさと散歩

NO.54

伊藤左千夫100回忌メモリアル企画展示「左千夫のてがみ」Ⅲ「節へ」(長塚節)を1月11日(土)6月1日(日)まで資料館1階展示室で開催しています。

左千夫と節は子規(1867-1902)門下で双壁と言われ、性格・文学は対照的であったが、個人的には終生親しい交流を続けていました。



長塚 節生家

節は明治12年(1879)4月3日、茨城県岡田郡国生村(現常総市)の豪農の家に生まれました。明治26年(1893)4月茨城中学校(現茨城県立水戸第一高等学校)に首席で入学、4年生まで進学したが脳神経衰弱を発症し退学。郷里で静養に努めていましたが、新聞「日本」に連載された『歌よみに与ふる書』を読み、その写生説に激しく共感し、21歳で入門『阿羅々木』の創刊に携わります。農村を写實的に描写した長編「土」を東京朝日新聞に連載、農民文学の先駆けとなる重要な作品と評価され、節の代表作となりました。

明治44年8月頃から喉が痛み、東京の名医といわれる医者をつくつか廻って診察を仰ぐも「喉頭結核でこのままでは余命1年か1年半」と言われます。大正元年(1912)3月、九州帝国大学医学部に耳鼻咽喉科の名医久保猪之吉博士の評判を聞き、博士の治療を受けるために九州へ旅立つが、途中京都医科大学に入院、大正4年(1915)1月に九州帝大病院隔離病棟に入院、2月8日同病院にて死去。享年満35歳。

企画展では左千夫との手紙・書簡を中心に子規門下双壁と言われた二人の交流を紹介します。

歴史民俗資料館

☎(82)2842



長塚節立像

神崎神社にて
(神崎町)

前列右から

長塚 節
伊藤左千夫
寺田 憲

記念講演

日時 3月22日(土)

午後1時半〜3時

場所 成東文化会館のぎくプラザ視聴覚室

講師 河合 宏先生(長塚節研究会事務局長)

演題 「長塚 節」について

さんむのふるさと散歩

左千夫短歌会

望の夜をしかと控へて上弦の月立つまほら森の秀の上
車窓へと迫り来たれる富士の嶺雲が懸かりて姿を見せず
庭のバラ氷雨に濡れてふるえおり無言電話にわれの心も
殊更に親孝行はしくとも不幸がなくば良しと思えり
女郎花そこだけ白く夕暮れぬ今日は一日人と語らず
胃の検診思いのほか簡単に画面に映るわが胃はきれい

今関 久義
前田 一夫
永山 洋子
高崎ヨシ子
岡本 秀
今関 礼子

くろしお短歌会

青蛙厨のわれを覗きをり軒のハツ手の葉に正座して
恙なく今日のひと日も終えたれば明日を信じて香焚く夕べ
梅雨明けの一人も居ない海岸は夕暮れなれど休日明けは
息子に甘へ腕ゆだねて初詣その横顔をそつと盗み見つ

今関満寿江
鈴木ひさよ
佐伯 慶一
関島恵美子